

制限付きバウムテストの可能性の検討 —大学生の強迫傾向に着目して—

平山聖¹⁾ 上田琢哉²⁾

1) 草加すずのきクリニック

2) 青山学院大学教育人間科学部心理学科

Consideration of possibility of the restricted baum test -focusing on the obsessive compulsive personality tendency in Japanese university students-

Hijiri Hirayama¹⁾ Takuya Ueda²⁾

1) Soka Suzunoki Clinic

2) Department of Psychology, Faculty of Education and Human Sciences, Aoyama Gakuin University

This study shows that the possibility of the baum test with some restrictions. In addition, we focused the obsessive compulsive personality disorder, especially indecision tendency. The restriction that we put is drawing orders like start drawing from the root, and next draw stem, etc.. We asked participants to follow the orders when they draw their baum tests in order to project their inner images more freely. As a result, we found that the people with the indecision tendency may draw bigger and more open-minded tree due to following orders. Considering from the results, they may feel safe ,or alternatively peace under this restriction because of getting narrowed the range of decisions and responsibilities and finally, with enhancing their activities, they may act more easily. In this study, we suggested that there would be the new possibility of development of ways to carry the baum tests.

キーワード：バウムテスト，強迫傾向，描画順序

Keywords: baum test, obsessive compulsive personality disorder, drawing order

1. 問題と目的

1-1. バウムテストについて

人格診断のための補助手段として教育現場や臨床現場などで多く用いられている心理検査としてバウムテストがある。バウムテストは、Koch (1957) によって体系化された、実のなる木を一本描かせるという投影法の一種の描画法であり、被験者への負担が少なく、比較的簡便であるという利点が挙げられ、高橋・高橋 (2010) によれば

被験者が無意識のうちに感じている基本的な自画像などが投影される。

バウムテストは実施の簡便さや投影内容の豊かさなどから臨床現場で多用されており、松原・江田・荒川・細谷・内田 (1981) によれば、アンケート調査を行った全国の児童相談所92ヶ所のうち、バウムテストが91%の児童相談所で常備されており、90%以上が検査結果について重要視すると回

答したと報告している。また中西（1984）によれば家庭裁判所ではSCTに次いで2番目、精神病院においては6番目、学生相談および児童相談所では3番目の使用状況である。

バウムテストの標準法は、A4サイズの画用紙を1枚、4Bの鉛筆、消しゴムを用意し、検査者が「実のなる木を描いて下さい」と教示する（佐々木・小川・柿木、1999）というものであるが、教示や施行法などを変化させて検討している先行研究が多く見られる。まず、青木（1988）は一般の大学生と絵画専攻学生を対象に、バウムテストの安定性を測定することを試みている。1回目は「実のなる木を1本描いて下さい」とし、2週間後に再度同じ教示で実施する群と、2週間後に「あなたが植えたいと思うような木を1本描いて下さい」と教示する群で2枚の樹木画を比較した。その結果、一般大学生では教示が変化しても2枚の描画で「樹高」、「樹幅」、「樹冠の長さ」などに共通して相関が見られたと報告している。

精神疾患傾向者を対象にバウムテストを実施した研究に関して、加曽利（2004）は神経症傾向およびうつ傾向のある大学生104名にバウムテストを実施した。分析項目は、用紙の空間使用領域および樹冠の高さ、幹の幅、葉、果実などの基本的なバウム指標10項目であった。その結果、神経症傾向高群における内面の不安定さや外界との適切な関係構築の葛藤が見られたと報告している。

これまで紹介してきたように、バウムテストについてはその教示や施行法に関して変化を加えて検討している研究が多く見られている。バウムテストは被検者への負担が少なく、臨床場面でも使用頻度が高いことから、その有用性についてさらに検討を加えていくことは意味のあることであると考えられる。

1-2. 強迫傾向および強迫症について

DSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 5th edition 日本語版, 2014) によれば、強迫症／強迫性障害 (Obsessive-Compulsive Disorder) は強迫観念および／または強迫行為によって特徴づけられる。強迫観念は繰り返し生じ

持続する思考、イメージ等であり、強迫行為は繰り返される行動または心の中の行為であるとされ、典型的には強迫観念に対応して行われ、強迫症をもつほとんどの人は強迫観念と強迫行為の両方をもつ。その世界的な有病率は1.1~1.8%であり、小児期では男児の罹患率が高いが、成人期では女性の方が若干罹患者の割合が多い (DSM-5, 2014)。

強迫症を発症する人々の多くは、非機能的な信念をもち、これらの信念に含まれる可能性があるものとして、過剰な責任感や完璧主義および不確かさへの不耐性等が挙げられている (DSM-5, 2014)。強迫症患者の強迫症状の構造について、Hodgson & Rachman(1977)が、①確認強迫 (checking)、②洗浄強迫 (cleaning)、③強迫性緩慢 (slowness)、④強迫疑惑 (doubting) の4主成分を抽出している。また、強迫症の心理的特徴として、古くから意志決定の障害が指摘されてきた (Reed, 1985など)。Reed (1976) は優柔不断を強迫症の中核的症状と見なし、実験的・臨床的にも優柔不断が強迫症患者に認められる認知的症状であることは確かめられている (Ferrari & McCown, 1994; 李, 2004)。Frost & Shows (1993) は強迫症の意志決定の困難さについて、背景には、自分の決断が間違いないかどうか確信が持てない傾向があると指摘している。さらに強迫行為の背景について、松永 (2015) は「まさにぴったり感 (just right feeling)」の追求があるとしている。

ここまで強迫症／強迫性障害の主な特徴について述べてきたが、強迫的な思考や行動はOCD患者特有のものではなく、似たようなことが健常者の中でも認められている (Rachman & de Silva, 1978; Salkovskis & Harrison, 1984)。Salzman (1968) は「強迫パーソナリティ」という概念を提唱し、今日もっともよくみられる性格であり、様々な病態の基礎に共通して存在する性格として広く捉え直そうとした。つまり、健常者の範疇に見られる強迫的な心性から、強迫神経症を経て、抑うつや恐怖症などへといたる一連の病像を強迫スペクトルと呼んだ (竹林, 2002)。笠原 (1991) は青年期においてよく見られる病態を総括し、登校拒否・思春期やせ症・対人恐怖症などには強迫パーソナ

リティが通底していると述べている。また、強迫症状は多くの場合、手洗いや施錠の確認など日常や社会生活における通常の思考や行動の延長線上にあるとされ（松永・切池, 2007）、強迫観念と似たような内容の、意思とは無関係な侵入思考はOCDでない集団の約80～90%で経験されるという説もある（Clark, 2006）ことから、パーソナリティとしての強迫性と疾患としての強迫性は地続きのものと考えられる。DSM-5（2014）においても、秩序や完璧主義にとらわれ、手順や形式に極端にこだわり柔軟性や開放性が損なわれる心性を「強迫性パーソナリティ」としている。このように、近年は強迫症に見られる特徴についてそのレベルの多様性が指摘される（Matsunaga et al., 2002）とともに、健常者の中にもスペクトラムとして存在していると考えられるようになっていく。成田（1994）は、強迫的現象が強迫神経症のみならず、非常に広く認められるものだとして述べている。加えて、自身の精神科を受診した青年期患者の実態を1978年と1988年の10年間で比較し、広義の強迫性格（几帳面、完全主義、自己の感情や他者をコントロールしようとする欲求をもつが精力的に乏しいなど）の上に発症したと思われる病態—うつ病、強迫神経症、登校拒否などが増加したと報告している（成田, 1994）。さらに、笠原の指摘を引用し、上記のような性格が昨今増加しつつあること、今日の日本の青少年の神経症的登校拒否、やせ症などの人の中に強迫パーソナリティがきわめて高頻度に見られることを論じている。

1-3. 強迫傾向を対象としたバウムテスト施行の可能性

バウムテストを強迫症患者に実施した研究は、佐藤・木之下・高崎・岩崎・吉田・竹村（2007）が精神科・心療内科に入院若しくは通院中の患者36名に対しバウムテストを実施し統計的な画像解析を行ったものなどがある。木之下ら（2007）は、強迫性障害を含む6つの症状群の患者を対象に調査を行い、樹木の位置や木の型など描画の全体的な特徴について“ある（1）”“なし（0）”で評価した。その結果、強迫性障害群の患者の描画は用紙中央に描かれる傾向が強いことなどが示唆され

たと報告している。

このように、バウムテストを強迫症患者に実施した研究はいくつか見られるが、大学生の強迫傾向に着目し定量的かつ質的に検討したものは見られない。

また、バウムテストでは通常、幹から描き始め枝や樹冠に移っていくが、描き慣れている人の中には根から描く人もいる（高橋ら, 2010）という記述や、大学生99名のうち74.7%が幹から描き始めているという調査報告がある（佐渡・鈴木・田中・山本, 2012）。一方でLallemant（1976）は、木が種から発芽すると種は大地の中心と光の方へ同時に進んでいき、木の根元の中心部は上昇する幹と下降する根の間の部分に保たれ、成長や発展においてこの部分には大きな意味が与えられると記している。また同時に、伸びきった木全体を支える能力はその根元へ遡るため、根は〈担う力〉の問題が現れる部分であるとし、健やかに成長し担う力をしっかりともっている木は根から幹へと緩やかに伸びあがっていくことから根の描画の種類は各人の問題に示唆を与えることができると強調している（Lallemant, 1976）。

ここまで見てきたように、バウムテストは臨床現場でも多く用いられ、施行法についても種々の検討が加えられている。さらなる有用性の追求のために新しい施行法を検証することは大きな意味があるだろう。また、強迫傾向者は正確性へのこだわりやものごとが決められないという特徴があり、通常バウムテストではその教示の自由さが強迫傾向者の自由なイメージを反映させにくくしているのではないかと推察される。そこで、描く順番の指定という制限を加えることで描画法の新たな可能性や強迫傾向の制限状況下での特性等を捉えることができると考える。本研究では、制限付きバウムテストの可能性を検討するため、大学生の強迫傾向に着目し、「通常バウムテスト」と「描画の順番等を検査者が指定したバウムテスト」によって描画に違いが見られるかどうかを確認することを目的とした。

以上から、本研究では下記の仮説を立て、制限付きバウムテストの有用性を検証する。

2. 仮説

- ①通常のバウムテストの場合、強迫傾向高群の方が低群に比べ、全体の面積量が少ない
- ②通常のバウムテストの場合、強迫傾向高群の方が低群に比べ、描き込み、描き足し、細部の精緻化が少ない
- ③制限付きバウムテストでは、強迫傾向高群の方が低群に比べ、全体の面積量が多くなる
- ④制限付きバウムテストでは、強迫傾向高群の方が低群に比べ、描き込み、描き足し、細部の精緻化が多くなる

3. 方法

対象 都内私立大学生 100 名（男性 35 名、女性 65 名、平均年齢 20.06 歳 ($SD=1.4$)）であった。そのうち、制限なしの通常バウムテストを実施する調査に参加したのは 50 名（男性 17 名、女性 33 名、平均年齢 20.06 歳 ($SD=1.3$)）、制限付きバウムテストを実施する調査に参加したのは 50 名（男性 18 名、女性 32 名、平均年齢 20.06 ($SD=1.5$)）であった。

調査内容及び手続き 調査は個別・集団で実施し、(1) 性別、学年等を尋ねるフェイスシート及び (2) 強迫傾向を調べる尺度から構成される質問紙を渡し、回答させた後、制限なし群では通常のバウムテストを描かせた。制限あり群では制限付きのバウムテストを描かせた。質問紙は表紙を含めて 5 ページあり、所要時間は描画も含め 15 分ほどであった。

強迫傾向を調べるため、井出・細羽・西村・生和 (1995) の尺度を用いた。強迫傾向尺度は、「侵入的思考」「確認強迫」「洗浄強迫」「不決断」（各 6 項目）の計 4 下位尺度 24 項目から構成されており、それぞれの項目について、内容が自分の日頃の習慣や気持ちにどの程度当てはまるかの回答を「当てはまらない (1)」、「どちらかといえば当てはまらない (2)」、「どちらでもない (3)」、「どちらかといえば当てはまる (4)」、「当てはまる (5)」の 5 件法で回答させた。

バウムテストは A4 版の用紙、4B の鉛筆 1 本、消しゴム 1 個を配布し、教示のもと描かせた。描画に対して制限時間は指定せず、全体で 15 分程度の

調査であると記載した。教示は、制限なし群に対して実施する通常のバウムテストでは「実のなる木を 1 本描いてください」と伝えた。次に、制限あり群に対して実施する制限付きのバウムテストでは「実のなる木を一本描いてもらいます。ただし、私の言った順番に従って描いていってください」と伝えた。制限付きのバウムテストの教示の順番は①根っこや根の部分②幹③枝④葉っぱや葉の部分⑤実⑥対象者の自由な描き足しとした。

5 ページ目には、描画の感想として、3 つの質問項目について全て自由記述にて回答させた。質問項目は、1 つめが、『1. 描いていて、描きやすいと感じたところがあれば、理由とともに教えてください。』で、2 つめが、『反対に、描きにくいと感じたところがあれば、理由とともに教えてください。』で、3 つめが、『描きにくいと感じたところは、どうなれば描きやすいと思いますか?』であった。

倫理的配慮

実施の際は「青山学院大学人を対象とする研究に関する倫理」に基づき、研究説明書に従って倫理的配慮やデータの保存方法など、研究に関する説明を行い、参加者から同意を得た。その際、絵は統計的に処理されるため個人の特長は行わないことを伝えた。

結果の解釈

【数量的解釈】バウムの空間使用領域を調べるため、一谷ら (1988) の方法に従い、画面を縦に 20 等分、横に 14 等分、計 280 個のマスキに等分割し、全体を縦横に 4 等分し A (右上) B (左上) C (左下) D (右下) の 4 領域に分けた。各マスキに少しでも描かれていればカウントし、4 領域ごとに使用量を測定した。

また、加曾利 (2004) の方法に従い、基本的なバウム指標として 10 項目を選択した。長さ及び高さはすべて mm を単位とし、評価法は稲富ら (1999) の方法を採択し、以下の通り行った。

- (1) 樹冠の高さ：幹上部の葉や枝などによって構成された部分の高さを求めた。
- (2) 木の高さ：樹木全体の高さを求めた。
- (3) 成長指標：樹木の高さに対する樹冠の高さの割合である樹冠比を求めた。

- (4) 幹の幅：幹の長さの半分に当たる地点の幹の幅を求めた。
- (5) 樹冠の幅：樹冠の最も広い部分の幅を求めた。
- (6) 幹の割合：樹冠の幅に対する幹の幅の割合を求めた。
- (7) 成長枝数：1本線主枝数の本数を求めた。
- (8) 主枝数：幹から直接伸びている枝の本数を求めた。
- (9) 葉数：葉として描かれた総数を求めた。
- (10) 果実数：果実として描かれた総数を求めた。

上記の項目に加え、「根の面積量」、「地面の面積量」、「幹への描き込みの面積量」、根および地面の合計面積量、根、地面、幹への描き込みの合計面積量を算出した。測定方法は一谷ら（1988）の方法に従った。

【質的解釈】通常のパウムテストと制限付きパウムテストの変化を質的に検討するため、Kochのパウムテスト第3版（中島、宮崎訳、2010）の第5章 指標の理解および、高橋・高橋による樹木画テスト（2010）を参考にした。

4. 結果

制限なしあり条件と強迫傾向の各因子傾向高・低によって、上記のパウムテストの指標に影響があるか検討するため2要因の分散分析を行った。

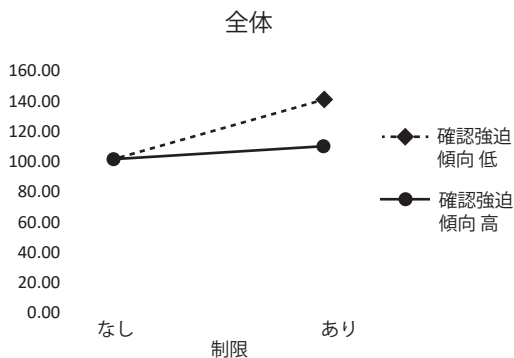


図1. 全体の面積量における制限条件と確認強迫傾向の交互作用

その結果、制限と①侵入的思考傾向との間に「地面の面積量」において有意な交互作用の傾向が見られた ($F(1,96)=2.85, p<.1$)。交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行ったところ、制限がないパウムテストよりも制限があるパウムテストによって、侵入的思考傾向が高い者の方が低い者よりも地面の面積量が少なくなった ($F(1,96)=5.51, p<.05$)。

次に、制限と②確認強迫傾向との間に有意な交互作用が見られた項目は「領域Bの面積量」、「領域Cの面積量」、「全体の面積量」、「根の面積量」であった（それぞれ、 $F(1,96)=5.18, p<.05$; $F(1,96)=4.97, p<.05$; $F(1,96)=4.99, p<.05$; $F(1,96)=4.44, p<.05$)。交互作用が有意であったため、各項目において単純主効果の検定を行った。その結果、制限がないパウムテストよりも制限があるパウムテストによって、確認強迫傾向の高い者は低い者よりも領域B・C・全体・根の面積量が少なくなった（それぞれ、 $F(1,96)=9.81, p<.01$; $F(1,96)=6.75, p<.05$; $F(1,96)=9.49, p<.01$; $F(1,96)=6.26, p<.05$)。交互作用の結果を抜粋し、以下に示す（図1., 図2.）。

次に、制限と③不決断傾向との間に有意な交互作用が見られた項目は、「領域Aの面積量」、「領域Bの面積量」、「領域Dの面積量」、「全体の面積量」、「木の高さ」、「樹冠の幅」、「幹への描き込みの面積量」であった（それぞれ、 $F(1,96)=6.27,$

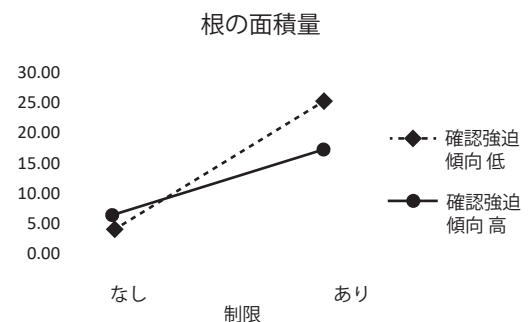


図2. 根の面積量における制限条件と確認強迫傾向の交互作用

$p<.05$; $F(1,96)=4.99$, $p<.05$; $F(1,96)=6.20$, $p<.05$; $F(1,96)=6.15$, $p<.05$; $F(1,96)=7.53$, $p<.01$; $F(1,96)=5.04$, $p<.05$; $F(1,96)=4.06$, $p<.05$)。交互作用が有意であったため、各項目において単純主効果の検定を行った。その結果、不決断傾向の高い者は、制限がないバウムテストよりも制限があるバウムテストによって領域A・B・D・全体の面積量が多くなり、木が高くなり、樹冠の幅が広くなり、幹への描き込みの面積量が多くなった (それぞれ, $F(1,96)=16.88$, $p<.001$; $F(1,96)=12.78$, $p<.01$; $F(1,96)=12.94$, $p<.01$; $F(1,96)=16.28$, $p<.001$;

$F(1,96)=18.53$, $p<.001$; $F(1,96)=5.79$, $p<.05$; $F(1,96)=4.53$, $p<.05$)。また、「幹への描き込みの面積量」を除く全ての項目で制限なし群において不決断傾向の単純主効果が有意であり、制限がないバウムテストにおいて不決断傾向の高い者の方が低い者より領域A・B・D・全体の面積量が少なく、木の高さが低く、樹冠の幅が狭かった (それぞれ, $F(1,96)=9.86$, $p<.01$; $F(1,96)=5.24$, $p<.05$; $F(1,96)=8.83$, $p<.01$; $F(1,96)=7.76$, $p<.01$; $F(1,96)=7.76$, $p<.01$; $F(1,96)=7.60$, $p<.01$)。交互作用の結果を抜粋し、以下に示す (図3. ~図5.)

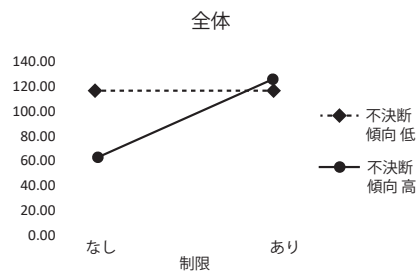


図3. 全体の面積量における制限条件と不決断傾向の交互作用

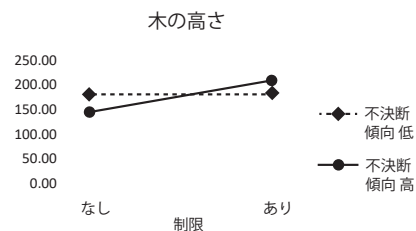


図4. 木の高さにおける制限条件と不決断傾向の交互作用

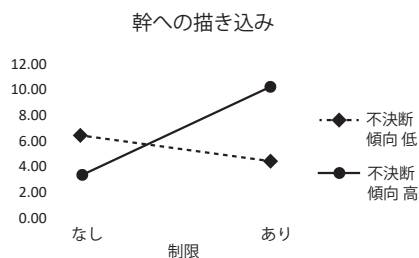


図5. 幹への描き込みの面積量における制限条件と不決断傾向の交互作用

最後に、制限と④洗浄強迫傾向の有意な交互作用の傾向が見られた項目は、「地面の面積量」と「木以外の描き足しの面積量」であった（それぞれ、 $F(1,96)=2.87, p<.1$; $F(1,96)=3.86, p<.1$ ）。交互作用が有意傾向であったため、単純主効果の検定を行ったところ、洗浄強迫傾向高群において、制限がないバウムテストより制限があるバウムテストによって地面および木以外の描き足しの面積量が多くなった（それぞれ、 $F(1,96)=12.57, p<.01$;

$F(1,96)=18.38, p<.001$ ）。また、制限あり群において、洗浄強迫傾向高群の方が低群よりも地面および木以外の描き足しの面積量が多くなった（それぞれ、 $F(1,96)=6.65, p<.05$; $F(1,96)=7.84, p<.01$ ）。

4-1. 実際の描画例

調査の過程で収集した描画を何例か以下に示す（図6. ～図9.）

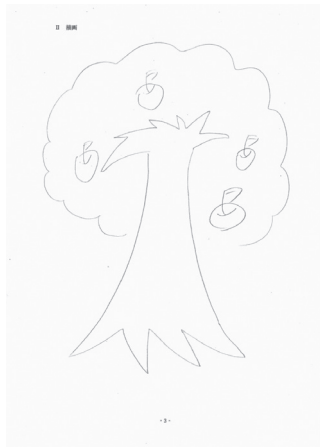


図6（左）No.28（制限なし×不決断傾向低群（9/30点））の描画

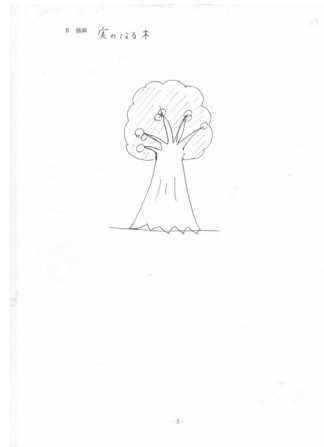


図7（右）No.44（制限なし×不決断傾向高群（26/30点））の描画



図8（左）No.15（制限あり×不決断傾向低群（8/30点））の描画



図9（右）No.32（制限あり×不決断傾向高群（26/30点））の描画

5. 考察

5-1. 制限なしあり群間の比較で見る強迫傾向高低群間のバウム特徴の違い

2要因の分散分析により、制限と強迫傾向合計との間には全ての項目において有意な交互作用は見られなかった。

続いて、強迫傾向尺度を構成する4因子の高・低群間と制限なしあり条件が描画に与えた影響について考察してみたい。

制限と侵入的思考傾向の検討

分析の結果、制限と①侵入的思考傾向との間に「地面の面積量」において有意な交互作用の傾向が見られた。このことは、制限を加えたことで侵入的思考傾向の高い者は地面の面積量が少なくなり、低い者は多くなったことを表している。侵入的思考傾向の高い人たちは、順番の指定という制限によって自らの意思とは無関係の思考が入り込む余地が増え、かえって描画の表現を不自由にしたのではないだろうか。

より内面的には、「地面」は現実処理の適切さや衝動の統制を表す（高橋ら, 2010）とされている。つまり、侵入的思考傾向の低い者は明確な指示を与えられたことで適切な現実処理を行い、その結果として地面の面積量が増え、侵入的思考傾向の高い者は強まった不安や不安定感がそのまま地面の面積量の少なさに表れたのではないかと考える。

制限と確認強迫傾向の検討

次に、制限と②確認強迫傾向との間に有意な交互作用が見られた項目は「領域Bの面積量」、「領域Cの面積量」、「全体の面積量」、「根の面積量」であった。これは、制限を加えたことで確認強迫傾向の低い者は用紙の左側および全体の面積量、根の面積量が多くなり、確認強迫傾向の高い者はそれらが少なくなったということを表している。確認強迫傾向の高い人は、制限を加えられることで、確認する項目が増え、かえって描画の表現が小さくなったのではないかと。

より内面的には、用紙の左側は過去、受動性、消極性、感情を象徴する（高橋ら, 2010）とされている。また、根や幹の根元は、過去、家族、社会に根づく自我の安定性の程度や無意識の欲求な

どを表す（高橋ら, 2010）とされている。これらのことから、制限を加えたことで確認強迫傾向の低い者は受動的かつ消極的になり、過去志向が強まった結果、自我の安定性を過去に求めたのではないかと考える。確認強迫傾向の高い者は、確認という行為に気をとられ感情が疎かになり、自我の安定性が低くなった可能性があると考えられる。

制限と不決断傾向の検討

次に、制限と③不決断との間で有意な交互作用が見られた項目は、「領域Aの面積量」、「領域Bの面積量」、「領域Dの面積量」、「全体の面積量」、「木の高さ」、「樹冠の幅」、「幹への描き込みの面積量」であった。さらに、「幹の幅」では有意な交互作用の傾向が見られ、制限なし群において不決断の単純主効果が有意であった。

これは、制限を加えたことで、不決断傾向の高い者の、用紙の上側・右下および全体の面積量が増え、木が大きくなり、幹への描き込みが増えたことを表している。不決断傾向の高い人は、確認強迫傾向の高い人とは反対に、制限のあることで何を描くべきかを決定する不安から離れることができ、むしろ安心したために各項目の面積量や描き込みが増えたのではないかと。

より内面的には、用紙の右上・左上・右下は、高橋ら（2010）によれば、それぞれ、目標・完成、空想・芸術、無気力・混乱などを表すとされる。また、描画像のサイズは自尊心、活動性などを象徴する（高橋ら, 2010）と考えられており、幹の幅は外界への働きかけの積極性や情緒の深さを表す（高橋ら, 2010）とされる。樹皮は外界や他人との接触の仕方を表すことが多く（高橋ら, 2010）、樹皮の状態への過度な関心は外界への防衛的態度が強いことを表す（高橋ら, 2010）と考えられており、「汚れ」や「しみ」は、客観的観察力や適切な感受性を表すことが多い（高橋ら, 2010）とされる。

これらのことから、制限を加えたことで、不決断傾向高群の完成意欲や空想性、芸術性が高まり、同時に、制限がない状態においては、不決断傾向の高い者は目標を持ちにくく、芸術性が乏しく、自尊心や活動性が低く、外界への働きかけは消極

的な状態である可能性があると考えられる。つまり、自分の決断に確信がもてないと考えられている（Frost & Shows, 1993）不決断傾向の高い者にとっては、指示という制限を与えられた方がむしろ強い完成意欲をもって課題に取り組むことができ、芸術性といった精神的余裕も生まれると考えられる。

制限と洗浄強迫傾向の検討

最後に、制限と④洗浄強迫傾向との間では「地面の面積量」と「木以外の描き足しの面積量」において有意な交互作用の傾向が見られた。洗浄強迫傾向の高い人は、制限のあることで、自身にとって不明確な部分や排除したくなる部分が減り、むしろ安心して描き進められるため面積量や描き足しが増えたのではないかと考えられる。

より内面的には、先述の通り、「地面」は現実処理の適切さや衝動の統制を表す（高橋ら, 2010）とされる。また、成人の絵において太陽や「小動物」が見られる場合、幼児性や依存性を表す（高橋ら, 2010）と考えられており、「花」は自身の衝動を意識し、環境との妥協を図ったり、無意識の欲求を隠そうとしている可能性がある（高橋ら, 2010）とされている。

これらのことから、制限を加えたことで、洗浄強迫傾向の高い者は適切な現実処理を行い、自らの衝動を感じつつも統制して環境との妥協を図った可能性があると考えられる。

以下は、下位因子と描画の変化に関する考察をまとめたものである。

5-2. 全体考察

本研究では、完全に自由な「通常のバウムテスト」よりもむしろ多少不自由なバウムテストの方が対象者の特徴が描画によく表れる場合があるのではないかと想定の下、青年期の強迫傾向に注目して、「制限付きバウムテスト」の可能性を検討した。なかでも不決断因子に特に着目し、指示の自由さが与える影響について、彼らのかかえる意志決定の困難さとの関連を検討することを目的とした。その結果、強迫傾向を構成するいくつかの因子については「制限付きバウムテスト」により、指標の量的な点において高群の方が低群に比べ、その量が有意に大きくなる傾向にあった。

まず、制限条件と強迫傾向合計得点との間に有意な交互作用は見られなかった。一方、下位因子ごとでは、交互作用や主効果に様々な結果が見られた。つまり、仮説①～④は強迫傾向全体としては支持されないが、下位因子においては部分的に支持されたと言える。

第一に、制限を加えたことで強迫傾向高群の方が値が大きくなった項目として、不決断因子における領域A・B・D・全体の面積量、木の高さ、幹の幅、樹冠の幅、幹への描き込みが挙げられる。このことから、不決断傾向高群、すなわち意思決

表1. 制限条件で見られた強迫傾向とバウムテスト指標との関係

強迫傾向 \ 制限	あり	
①侵入的思考	減少	地面の面積量 ：現実処理の適切さや衝動の統制 傾向の高い者は制限を加えたことで不安や不安定感が強まり、 現実処理の精度が低くなった可能性
②確認強迫		領域B・C・全体、根の面積量 ：過去、受動性、感情、自我の安定性の程度 傾向の高い者は制限を加えたことで確認する行為に注力し、 感情が疎かになり、自我の安定性が弱まった可能性
③不決断	増加	領域A・B・D・全体の面積量、木の高さ、樹冠の幅、幹への描き込み ：完成、空想、自尊心、外界への働きかけの積極性、客観的観察力 傾向の高い者は制限を加えたことで完成意欲、空想性、自尊心が高まり、 客観的な観察力をもって外界に対して積極的に働きかけられるようになった可能性
④洗浄強迫		地面の面積量、木以外の描き足し（太陽、小動物、花） ：現実処理の適切さや衝動の統制、幼児性、環境との妥協 傾向の高い者は制限を加えたことで衝動を自覚しつつも、 統制して外界との調整を図った可能性

定に困難を生じやすい人は制限付きのバウムテストによって面積量が増え、木が高くなり、幹への描き込みが増えたことを表している。また、侵入的思考・確認強迫・不決断因子で「木以外の描き足し」において制限の主効果が見られ、洗浄強迫因子では有意な交互作用が見られた。

近藤 (2016) は、バウムテスト、S-HTPP法、風景構成法の描画過程を比較し、バウムテスト以外の2つに見られるプロセスとして「連想プロセス」を挙げている。これは近藤 (2016) によれば、複数のアイテムを描くことで場面や風景のゲシュタルトが描かれ、それからまた新たなイメージが生じ、創造性が発揮されて全体が変容していく過程である。本研究において木の部分を描画のアイテムとして調査者が指定していったことで、本来バウムテストで生じにくい「イメージの動きやすさ」が生まれたといえるのではないだろうか。

これは、特に強迫傾向のような特徴には、描画検査において「完全な自由」よりも「順序が指定される」など制限があった方がむしろ自由に自分の内面を投影できるものになっていると考えられる。中でも不決断傾向の高い人は自分の決断に確信が持てず、過剰な責任感を持つとされるが (Frost & Shows, 1993 ; Rachman, 1978)、描く順番の指定という今回の制限によって決断と責任の範囲が狭まり、安心感に繋がったのではないだろうか。詳細な指示があったことで行動しやすくなり、活動性が増し、本来もつ責任感の強さを発揮することで自尊心も高くなると考えられる。

以上から、多少不自由のある制限付きのバウムテストの方が、被検査者は自由に表現できる場合があることが明らかになり、今後のバウムテストの施行法に関して発展の可能性あることを示唆した。

6. 本研究の課題と今後の展望

本研究では、制限のないバウムテストと制限付きのバウムテストを、それぞれ異なる対象者に実施した。各群での強迫傾向を測定し高低に分けバウム指標などの平均値を比較した。この方法でも制限を加えたことと強迫傾向との関連をいくつか見ることができた。ただ、制限なし群とあり群で

対象者が異なるため、各群の個性の可能性を否定できない。したがって、同一の対象者に制限のないバウムテストと制限付きのバウムテストを実施することで、群間差が統制された状態で、個人内差の比較によって制限の効果を捉えることができるだろうと考える。

また、本研究では大学生の強迫傾向に焦点を当てたため、調査の対象者も大学生となっている。そのため、実際の臨床場面でも用いることができるかを検証していくことは今後の課題の1つとなるだろう。したがって、対象者を臨床群と非臨床群にして実施したり、より強迫症状が重い人のデータも収集して検討を重ねていく必要があると考える。

また、自由記述において「描きやすいと感じたところ」、「描きにくいと感じたところ」という項目設定をした結果、木の部分を答える人が多かった。これによって順番の指示がどう影響を与えたかという、求めている回答を得ることが難しかった。したがって、制限あり群には、順番を指定されたことによって描きやすかったかどうかを訊く項目を設けるべきであろうと考える。加えて、順番の指定が実際に安心感に繋がったのかを調べるため、描画前後の感情を尋ねる必要があると考える。さらに、本研究とは異なる順番の指定とバウムテストの描きやすさとの関連について、今後の研究において明らかにしていきたいと考える。その際は、制限なし群において「どのような順番で木を描いたか」を訊き、参考にしたいと考える。バウムテストに限らず、より本質的な興味としては、描画法の自由さと描きにくさの間にあるその他の要因についてや、「のびのびと」表現できる投影法・描画法のやり方についてさらに研究を進めていきたい。

本研究では強迫傾向の不決断因子に注目し、意思決定の困難さに焦点を当てた。意思決定に不自由さをもつ者が他者から描く順番を指定された際の自由なイメージの表れ方を検討することはさらなるバウムテストの可能性の追求や強迫傾向の理解へ向けて意義のあることであると考えられる。

参考文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*. United States : American Psychiatric Publishing.
(米国精神医学会 高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 青木修 (1988). バウムテストの安定性に関する検討. 心理測定ジャーナル, 24, 15-20.
- Clark, David・A. (2006). (丹野義彦 (監訳). 杉浦義典・小堀修・山崎修道・高瀬千尋 (訳). 侵入思考—雑念はどのように病理へと発展するのか 星和書店)
- Ferrari, J. R. & McCown, W. (1994). Procrastination tendencies among obsessive-compulsives and their relatives. *Journal of Clinical Psychology*, 50, 162-167.
- Frost, R. O., & Shows, D. L. (1993). The nature and measurement of compulsive indecisiveness. *Behavior Research and Therapy*, 31, 683-692.
- Hodgson, R. J. & Rachman, S. (1977). Obsessional-compulsive. *Behaviour Research and Therapy*, 15, 389-395.
- 一谷彊・相田貞夫・小林敏子・津田浩一・山下真理子・弘田洋二・松井孝史 (1988). バウムテストによる生涯の発達研究〔Ⅲ〕——空間領域の使用量と加齢の関係——. 京都教育大学紀要, Ser. A, 72, 1-29.
- 井出正明・細羽竜也・西村良二・生和秀敏 (1995). 強迫傾向尺度構成の試み 広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編, 第21巻, 171-182.
- 稲富宏之・田中悟郎・林田博典・太田保之 (1999). バウムテスト特徴からみた慢性精神分裂病患者の人格特性——バウムテスト特徴の数量的検討—— 長崎大学医療技術短期大学部紀要, 13, 97-101.
- 笠原嘉 (1991). 青年期の発達とその精神病理 思春期青年期精神医学, 1 (1), 39-42.
- 加曽利岳美 (2004). 神経症傾向およびうつ傾向のある大学生に見られるバウムテストの特徴——GHQ (General Health Questionnaire) を用いた定量的分析—— 共栄大学研究論集, 3, 106-122.
- Koch, K. (1970). *The Tree Test*.
(林勝造, 国吉政一, 一谷彊訳 (1970). バウムテスト——樹木画による人格診断法 日本文化科学社)
- Koch, K. (1957). *Der Baumtest : Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*, Auflage. Bern : Hans Huber.
(コッホ, K. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト——心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究——. 誠信書房)
- 近藤孝司 (2016). 描画法の描画過程における主観的体験の検討——バウム法, S-HTPP法, 風景構成法の描画過程の比較——. 上越教育大学研究紀要, 35, 135-145.
- 松原達哉・江田遵子・荒川優子・細谷和恵・内田恵子 (1981). 全国児童相談所における心理検査の利用の実態と問題 心理測定ジャーナル, 17, 9-13.
- 松永寿人 (2015). 強迫症の診断概念, そして中核病理に関するパラダイムシフト——神経症, あるいは不安障害から強迫スペクトラムへ——. 不安症研究, 6 (2), 86-99.
- 松永寿人・切池信夫 (2007). 強迫性障害 (OCD) の概要 精神神経学雑誌, 109 (2), 147-151.
- Matsunaga, H., Kiriike N., Iwasaki Y., et al. (2002). Obsessive-compulsive disorder patients with poor insight. *Compr Psychiatry*, 43 ; 150-157.
- 中西真由美 (1984). 心理臨床家の心理テスト利用の実態 心理測定ジャーナル, 20, 20-24.
- 成田善弘 (1994). 強迫症の臨床研究 金剛出版
- Rachman, S. & de Silva, P. (1978). Abnormal and normal obsessions. *Behaviour Research and Therapy*, 16, 233-248.
- Reed, G. F. (1976). Indecisiveness in obsessional-compulsive disorder. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 1, 443-445.

- 李曉茹 (2004). 強迫傾向に関する研究の展望
——健常者に対する予防の視点から—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 44, 191–200.
- 佐渡忠洋・鈴木壯・田中生雅・山本眞由美 (2012).
バウムの描画プロセスに関する研究——バウムはどこから描かれ、幹はどのように構成されるのか——. 臨床心理身体運動学研究, 14, 59–68.
- Salkovskis, P. M. & Harrison, J. (1984). Abnormal and normal obsessions-A replication. *Behaviour Research and Therapy*, 22, 549–552.
- Salzman, L. (1968). The Obsessive Personality, origins, dynamics and therapy. New York : Jason Aronson.
(サルズマン, L. 成田善弘・笠原嘉 (訳) (1985). 強迫パーソナリティ みすず書房)
- 佐々木直美・小川栄一・柿木昇治 (1999). 我が国におけるバウムテスト研究の変遷と展望 広島修大論集, 40(1), 1–15.
- 佐藤菜生・木之下みやま・高崎いゆき・岩崎優美・吉田勝明・竹村和久 (2007). 樹木画の統計的画像解析とその解釈 (Ⅲ) ——画像のパタン分析—— 日本心理学会第71回大会発表論文集
- 高橋雅春・高橋依子 (2010). 樹木画テスト 文教書院
- 竹林奈奈 (2002). 青年期における強迫的心性に関する一考察：衝動性とコントロールの力動という観点から 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 236–248.
- Ursula Ave-Lallemant (1996). Baum-Tests (4th ed.). Munchen : Ernst Reinhardt Verlag.
(ウルスラ, A=L. 渡辺直樹・坂本堯・野口克巳 (訳) (2006). バウムテスト——自己を語る木：その解釈と診断—— 川島書店)

謝辞

本論文は、2019年度青山学院大学大学院教育人間科学研究科修士論文として執筆したものを、加筆修正したものです。本研究にご協力いただいた皆様に改めて感謝いたします。